

学 年	小6年	郡 市 名	碧南
提 案 者	碧南市立新川小学校		坂田伊百美

仲間とかかわりながら、よりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業
小学公民「人々の願いを実現する政治 ～いざという時のために、何ができるか考えよう～」

1 はじめに

今の社会は、生き方や価値観の多様性がもたらされ、子どもを取り巻く環境は大きく変化しようとしている。よりよい社会づくりへの参画のためには、社会的事象を多面的・多角的に捉え、社会的事象と自分とのつながりを強く意識しながら問題解決に向けて活動できる子どもの育成が重要となる。

そこで、碧南市社会科部会では、研究主題を次のようにとらえることとした。

「仲間とかかわりながら」の「仲間」とは、一緒に学び合う子どもだけを指すのではなく、学びを通してかかわる人々すべてを含んでいると考える。さまざまな人・もの・こととかかわることで、「もっと知りたい」「もっと調べてみたい」という思いとなり、主体的な学びにつながっていく。また、自分の考えを他者に伝えたり、他者の考えを聞いたりすることで、仲間とかかわりながら対話的に学ぶことができる。これらの活動を通して、深い学びへとつなげていきたい。さらに、多くの人との協働を通して追究していくことにより、問題の解決に取り組んだ達成感も味わうことができる。こういった経験を通して、「よりよい社会」をつくらうという意識を引き出したい。「よりよい社会」とは、そこにかかわる人にとって幸せを感じられる社会であり、互いの考えのよさを認め合いながら協働し、問題の解決が見えた先にある社会である。そのような社会にするために、子どもたち自らが参画への意識を高めたり、行動化へのきっかけをつくったりする姿を目指し、研究を行うこととした。

2 研究の基本的な考え方

(1) 主題設定の理由

本年度の研究テーマを受け、「仲間とかかわりを通して考えを深めようとする態度」と、「よりよい社会づくりへ参画しようとする姿勢」を身につけさせることに主眼を置いた。そこで、これらを身につけさせるための単元として、小学校6年生「震災復興の願いを実現する政治」を選択した。

本単元は、学習指導要領の第6学年内容(2)のアを受けて設定した。

(2) 我が国の政治の働きについて、次のことを調査したり資料を活用したりして調べ、国民主権と関連付けて政治は国民生活の安定と向上を図るために大切な働きをしていること、現在の我が国の民主政治は日本国憲法の基本的な考え方に基づいていることを考えるようにする。

ア 国民生活には地方公共団体や国の政治の働きが反映していること

本単元では、まず、政治は国民生活の安定と向上を図るために大切な働きをしていることについて学ぶ。特に、碧南市を含む東海地方には、南海トラフ地震による大きな被害が予測されていることから、地方公共団体や国の政治が自分たちの生活にどのように反映されているのか、防災を中心に調べていくこととした。

児童が防災を自分ごととして捉えられるように、最近の台風や東日本大震災による被害を例に、国や地方公共団体の救援活動や災害復旧の工事などについて、計画から実施までの期間や過程、規模や予算などを取り上げて具体的に調べた。そして、実際に自分たちの町で災害が起こったときには、市役所や国がどのように施策を進めていくのかを考えさせたい。

さらに、大規模な災害に際してどのように行動するのかを考えるには、自らも社会の一員であることを自覚する必要がある。自分と仲間の考えに重みを感じて、話し合おうという姿勢を育みたい。本学級の児童は、授業中は、思いついたことをすぐに言葉にするなど反応はよいが、深く物事を追求することを苦手としている。一方、少数ではあるが、丁寧に自分の考えを書いたり、友達の意見を聞いて考えをつなげたりしようとする児童もいる。一つのことを資料から深く読み取ったり、自分で調べたりして問いを生み、その問いに対して思考をめぐらせる力をつけ、学級全体での話し合い活動につなげていってほしいとの願いをもって授業を進めた。

(2) 目指す児童像

本研究を進めるにあたって、目指す児童像を次のように設定した。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">一人調べや話し合い活動を通じて、根拠をもって自分の考えをもつことができる児童仲間と意見を交流し合い、多面的・多角的に問題をとらえ、さらに考えを深められる児童 |
|---|

(3) 研究の仮説と手だて

研究主題をもとに、以下のような仮説と手だてを設定した。

仮説Ⅰ	自分たちの地域とも関連深いテーマを設定することで、政治と自分とのかかわりを意識し、切実感をもって学習に取り組めるだろう。	手だて	ア 地域と関連深い災害を題材に単元を設定する。
			イ ゲストティーチャーを招へいする。
			ウ 単元の最後に、話し合ったことを要望として市へ届けることにする。
仮説Ⅱ	話し合い活動を工夫することで、他者の考えをもとに自分の考えを再構築したり、根拠をもったりして、話し合いに参加できるだろう。	手だて	ア 一人調べの時間を確保し、話し合い前にワークシートに朱書きを入れる。
			イ 全体の話し合いの前に、グループで意見を交流する場を設ける。

(4) 検証の方法

本研究では、抽出児童Aの意識や活動の変容に焦点を当て、検証を試みる。

《児童A》

児童Aは、どの教科の授業でも、真剣に考える姿が見られる。感想などを書く際は、自分の思いをたくさん綴ることができる。しかし、発言はさほど多くなく、納得いくまで自分の意見をまとめることができるまで、思考を巡らせている。グループで話し合う際は、十分に調べ学習が進んでいるが、自分の意見や考えをすすんで述べることはあまりない。

本実践を通して、様々な角度から資料を読み取ったり、自分の意見を言ったりすることで、友達の考えと関連づけて、自らの考えを深められるようにさせたい。

仮説Ⅰに対して

手に入れた情報をもとに、確かな自分の考えをもつことができたか。

- ワークシートの記述を見る。話し合い活動の場面で、参加姿勢を見る。

仮説Ⅱに対して

話し合い活動のよさに気づき、考えを深めることができたか。

- 話し合い活動の場面で、参加姿勢を見る。授業の感想の内容を見る。

3 研究の実際

(1) 単元目標

- ① 地震などの災害復旧・復興の取り組みには、地方公共団体や国の政治の働きが反映していることに
関心をもち、進んで調べることができる。 (関心・意欲・態度)
- ② 政治は国民生活の安定と向上を図るために大切な働きをしていることを適切に考え、仲間に伝える
ことができる。 (思考・判断・表現)
- ③ 災害復旧・復興の取り組みについて、ゲストティーチャーや関係者から話を聞いたり、資料を活用し
たりして、地方公共団体と国の政治の働きについて必要な情報を集め、読み取ることができる。
(資料活用の技能)
- ④ 政治は国民生活の安定と向上を図るために大切な働きであり、防災や災害復興の取り組みは、国や
地方公共団体の政治の働きや住民自身の活動によるものであることを理解することができる。
(知識・理解)

《第一次》 碧南市でも心配される大きな災害について調べよう。(3時間)

- 1 東日本大震災や最近の大災害について知ろう** 碧南市で被害が心配される災害について当時の記事や映像から知る
 <台風15号・19号>…最近のニュース
 ・碧南市を直撃との予測だった。 ・全国各地で大きな被害。 ・停電が何週間も続いた。 ・災害救助法が適用。
 <東日本大震災>…新聞記事、映像、画像
 ・津波の被害が大きかった。 ・町がまるごと津波に飲み込まれている。 ・未曾有の被害と言われた。
- 2 東日本大震災後の取り組みを調べよう** 津波で甚大な被害のあった東日本大震災について教科書で調べる
 ・市町村に災害対策本部を設置し、避難所の開設、水や食料、仮設トイレ等の手配を要請した。
 ・県は、災害救助法を適用し、自衛隊の派遣要請、物資を送る準備などを行った。
 ・国は、特別予算を組んで、仮設住宅をつくったり、ライフライン復旧に使ったりした。
 ・海外の専門家や国内のボランティアからの支援が大きな力となった。

- 3 東日本大震災後の復興にかかわった人の話を聞こう** 東日本大震災の被災状況や復興にかけた思いと課題を聞く
 【ゲストティーチャー 大船渡市・陸前高田市・住田町での長期的な支援活動 NPO法人愛知ネット】
 ・震災後すぐに現地に入り、1年ほど行政と連携して復興に向けた活動をした。 ・愛知に避難した被災者の人たちの支援を続けている。
 <課題> ・被災者の心のケア、長期的な活動が必要だった。 ・仮設住宅に入れる期限があり、その後の生活のめどがたたない。
 ・高齢者や障害のある人など、より不自由を強いられる人たちの抱える不安。

碧南市にも想定される災害は、こんなにも大きな被害をもたらしたことに驚いたよ。そのうち来ると言われる南海トラフ地震。碧南市は大丈夫？

《第二次》 碧南市の人たちは何を願い、市ではどんな対策がされているのだろう？(3時間)

- 4 碧南市民は政治にどんな願いをもっているのだろう** 身近な行政・市政の運営のしくみと市民の思いを資料から読み取る
 <市民の構成> ・男性:女性 5:5 ・65歳以上 23% (5年で3%近く増えた) ・30年以上在住 6割
 <市政の満足度> ・各分野で「ふつう」が最も高く、次に「ほぼ満足」 ・防災対策、防犯対策、まちづくりで「やや不満」も多い
 ・「力を入れてほしい」分野は、保健医療、福祉、子育て支援、防災対策、防犯対策、まちづくり
 <市政アンケート> ・災害時の避難場所を決めていない 33% ・災害の種類で避難所が違うことを知らない 70%
 ・家具などの固定をしている 8% ・へきなん防災メールを知らない 45% ・3日分の備蓄がない 66%
 <市政運営のお金> ・税金の使いみち…学校、あいくる、ごみの処理など身近なもの他、災害救助にも
 ・使いみちの決め方…選挙で選ばれた人が決めている ・18歳から選挙権、税金の使い道を決める人を選ぶ

- 5・6 碧南市は災害に対してどのように備えているのだろう** 市の防災計画を知り、市民の意識と比べる
 【ゲストティーチャー 碧南市防災課防災計画係】
 <碧南市防災計画> ・市民の生命、身体と財産を保護することが目的 ・南海トラフ地震の被害の想定
 ・避難所の開設、運営 ・水、食品などの供給 ・防災のための教育
 <避難所> ・一番近い避難場所は、新川小学校 ・想定される避難者の数は、避難所の収容人数を超えている
 <備蓄倉庫> ・食料や水の他、トイレもある。 ・たくさんの人が避難してきたら、すぐに足りなくなる。どうなってしまうのだろう。

大きな地震と津波に備えた防災計画があるけれど、あまり意識して生活していないみたいだ。わたしたちにできることは何だろう。調べて話し合おう。

《第三次》 いざというときのために、碧南市に届ける願いをまとめよう！(4時間)

- 7 これからの行動計画を立てよう** 学習してきたことから生まれた疑問をもとに、どんな行動をしていくか話し合う
 ・避難所の場所はどこだろう ・わが家の備蓄は大丈夫だろうか ・地震と津波によるわが家の被害想定を知っておこう
 →家で確認したり、本やインターネットで調べたりして、情報収集をする
 ・避難所について調べよう → 災害の種類によって、避難所が違う。そこまで家族と決めておこう。
 ・新川小に避難するけど、学校の備蓄は足りないことが分かった。 → 家で3日分の水と食料を備えよう。
 ・避難所の生活で、わたしたちよりもっと困る人もいる → ふだんから、近所の高齢の人などに声をかけよう。

- 8 行動計画を分類しよう** クラスで出てきた行動計画を、話し合って分類する
 A 自分でできること<自助> B 家族や地域ですること<共助> C 行政が力を貸してくれたらできそうなこと<公助>
 A) 避難所を調べる 被害想定を調べて、きちんと情報収集をする
 B) 家の備蓄の種類を増やす 家の備蓄の内容を定期的に見直す 災害時の連絡方法を定める
 C) 防災備蓄倉庫の中身を見直す 学校以外の避難訓練をする 避難で困る人を助ける

- 9 市に届ける願いをまとめよう** 分類した行動計画から、市に要望する願いをまとめる
 C<公助>の計画について、具体的な内容を話し合う
 ・防災備蓄倉庫の中身を見直す ⇒ 食料や毛布を増やす 子どもや高齢者の比率に応じて変える
 ・避難所を快適に ⇒ パーテーションの用意 簡易トイレの数を増やす 携帯電話充電や空調設備のため発電機の用意
 ・学校以外の避難訓練をする ⇒ 地区ごとに日程を設ける
 ・避難で困る人を助ける ⇒ 市内の小中学生を高齢者見守り隊に育てる 地区ごとに防災教室を開く
 話し合いの様子や要望について励ましのコメントを頂く 【ゲストティーチャー 碧南市防災課防災計画係】

- 10 市に要望書を届けよう** まとめた願いを市に届ける
 市への要望書をまとめ、市役所に届ける

自分でできること、家族や地域の人と協力してすること、市役所の人とやることなど、いろいろある。政治にかかわることもできるんだね。これからの生活に生かしていこう。

(3) 授業の実践内容

《第一次》 碧南市でも心配される大きな災害について調べる **第1～3時** (仮説I・手だてア、イ)

第一次では、自分たちの暮らす碧南市で被害が心配される、台風や津波などの災害について知る活動を行った。児童の約半数は、「南海トラフ地震」が起これば、碧南市には、地震と津波によって大きな被害をもたらされると言われていることを知っていた。

そこで、第1時では、この年の台風15号・19号については、最近のニュースから、また、東日本大震災については、当時の新聞記事や教師が現地で撮った画像などから紹介した。第2時で、大きな災害時には、市町村が連携して救助や物資を手配したり、復興に向けた取り組みを行ったりすることを教科書で学習した。

【資料1】は、児童Aの第1時のふり返りである。災害時の備えの必要性や、現在の避難所などの備えについて知りたいと書いた。児童Aは、第2時で、多くの人が震災復興に向けて動いていることも理解することができた。

3. 被災した人々はどのような願いをもつただろう。

これ以上ないほどの備えがほしい。備えはとっただけであって、大々大々からし設
 ないにも関わらず、この備えが必要！でも自分で必要 → たくさんの商品が必要
 災害(自然)はふせけるものではないのでこのことを知って備えし、かして命を
 守る行動をしてほしい。考えてほしい。(災害にあわなから) 万が一のこと、変わらな
 ☆今日の授業のふり返り(感想や疑問に思ったこと) よく考えろ、子供!
 今 現在のし設の備え(食品)や生活に必要な電気がいらないもの
 がとんだけあるのを知りたい。 今後は... 来週!!
 くわしてを言う知言と苦しんでる人の気持ちに分らな。

【資料1】児童Aのふり返り(第1時)

【資料2】は、東日本大震災後の復興にかかわった人をゲストに招き、現地の被災状況や復興にかけた思いと課題をうかがった時の様子である。

この時、避難所で食料の配給をめぐって起きた問題や、小学校の体育館に避難した人たちが津波によって犠牲になった話などを伺ったことで、切実感をもつことができた。緊急地震速報の際のポーズを教えてもらおうと、児童は真剣に取り組んでいた。



【資料2】ゲストティーチャーを招いて

【資料3】は、児童Aの第3時のふり返りである。備えを意識し始め、ゲストティーチャーの話から、自助だけでなく、共助・公助の必要性についても認識し始めたことがわかる。

児童は、最近の大きな災害の被害に驚くとともに、「南海トラフ地震」を想定して、自分にできることは何だろうかと考え始めた。また、震災復興の願いを実現するために、政治が果たす役割が大きいことを学んだ。そして、自助(自分でできる備え)・共助(住民同士の協力)・公助(市で行うこと)という言葉を知り、その違いに興味をもち始めた。

自助(自分でできる備え)・共助(住民同士の協力)・公助(市で行うこと)という言葉を知り、その違いに興味をもち始めた。

自助 → 自分の命を守る、自分で守る。(共助 → 助け合って命を守る。
 公助 → 法律を適用し、支援する。愛知ネットは被災した場所に行き、お茶会
 や通信できる衛星など被災した人の気持ちを考え、よりよい支援活動をしている。
 が、最近どうもして来た等に人がいないが、そうだとすると、さかし終わった場所には
 印をつけて効率よくしているのを見て、なるほどと思えた。時間を無駄にしない。

【資料3】児童Aのふり返り(第3時)

そこで、次時からは、碧南市民の願いや碧南市の災害対策について調べていくことにした。

《第二次》 碧南市民の願いを読み取り、防災を中心とした市政の取り組みと比べる **第4～6時**

(仮説I・手だてア、イ)

第二次では、まず、碧南市民が政治に対してどんな願いをもって生活しているのかを知るために、市政アンケートの結果を用いた。第4時は、市民の構成や、市政分野別の市民の満足度を調べた。そして、市民が特に「力を入れてほしい」と願うのは、保健医療、福祉、子育て対策の分野、および、防災対策、防犯対策といった安全面にかかわる分野だと分かった。続いて、市民の防災対策について詳しく見てみると、災害の種類によって避難先が異なることを知らない、3日分の備蓄がない、という人が7割近くいることが分かった。家具の固定をしている人は1割にも満たなかった。調査結果の読み取りから、子どもたちは、防災分野で市政に望むことは多いが、自らできることをしていない人が多いことも知った。

さらに、児童たちにも同様の市政アンケートに答えさせた。【資料4】は、その集計結果である。結果からは、市民よりも防災意識が低いことが分かった。児童Aは市民および自分たちの意識の低さを知り、「だれかにたよる（聞く）のではなく、最初からもっと知っているのととてもよいと思う。自分が知っていることで、自助、共助と、備えていけると思う。」とふり返りを書いており、具体的な行動や自助、共助の必要性にふれている。

H30碧南市政アンケート 防災対策

問	質問	回答	604	604割合(%)	碧南市民割合(%)
13	避難場所	決めている	16	53.3	64.1
		決めていない	14	46.7	33.4
14	避難場所に種類がある	知っている	4	13.3	27.2
		知らない	26	86.7	70.6
15	3日分の備蓄	備蓄している	14	46.7	31.8
		備蓄していない	10	33.3	66.1
15	の4日、日数に備蓄は回答	わからない	6	20	—
		その他	15	50	74.7
15	備蓄しているもの	缶詰	11	36.7	44.0
		即席めん	6	20	47.3
15	備蓄しているもの	保存米飯	6	20	47.3
		飲料水	20	66.7	95.0
15	備蓄しているもの	懐中電灯	20	66.7	87.1
		医薬品	12	400	38.6
15	備蓄しているもの	ラジオ	9	300	67.2
		携帯トイレ	3	100	27.8
15	備蓄しているもの	その他	4	13.3	13.7
		わからない	1	3.3	—

問	質問	回答	604	604割合(%)	碧南市民割合(%)
16	家族などの固定	固定している	6	200	7.7
		一部している	15	500	46.4
16	家族などの固定	していない	9	300	44.2
		わからない	2	6.7	—
16	固定してはいない理由	どちらか被害でる	1	3.3	17.3
		手前倒	10	33.3	37.3
16	固定してはいない理由	方法が不明	1	3.3	15.2
		家賃が高いので安全	0	00	7.2
16	固定してはいない理由	南海トラフ起きない	1	3.3	2.1
		家をいためる	1	3.3	3.7
16	固定してはいない理由	被害被害で不可	3	100	11.3
		その他	2	6.7	5.1
16	固定してはいない理由	毎日聞く	0	00	1.5
		ときどき聞く	7	23.3	12.9
16	固定してはいない理由	知っているが聞かない	11	36.7	35.9
		知らない	12	40.0	47.6
17	いづれも災害の種類	知っている	11	36.7	50.1
		知らない	16	60.0	47.0
18	自主防災会	知っている	1	3.3	20.6
		知らない	29	96.7	78.1
20	防災メール	知っている	14	46.7	48.9
		知らない	16	53.3	49.9

【資料4】第4時「市政アンケート」のクラスでの回答

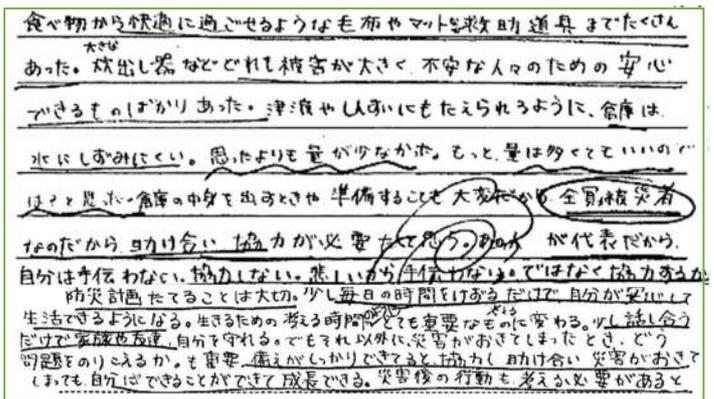
第5時では、市の防災課の担当者から、市の防災計画について聞いた。南海トラフ地震の被害想定も示していただき、その被害の甚大さに驚いた。第6時で、防災課の担当者に、学校の敷地内にある防災備蓄倉庫を案内していただいた。その中身を見て、児童は、備蓄倉庫の食料と水の少なさにかなり驚いていた。【資料5】は、その時の様子である。



【資料5】担当者からの説明

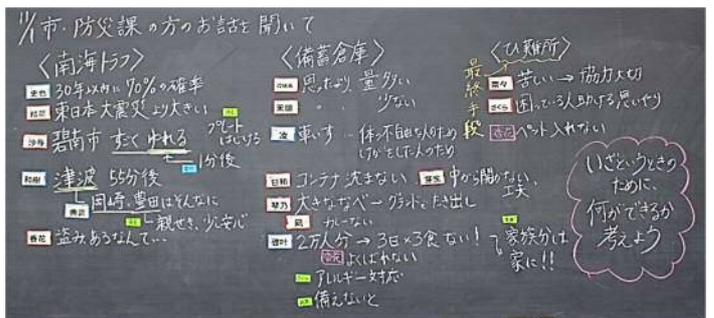
担当者からの話でも、防災計画は整っている一方、市に高い期待をもちながらも、高い防災意識をもたずに生活している市民が多いことがわかった。また、避難所への避難は最終手段であること、備蓄は自分ですべきものだという理解できた。

【資料6】は、児童Aが第5・6時をふり返ったものである。防災備蓄倉庫の中を見て、いろいろな種類の物がある一方、食料と水の量の少なさに気づき、避難することになった場合の助け合いや協力が重要であると考えている。



【資料6】児童Aのふり返り（第5・6時）

また、【資料7】は、第5・6時の後、児童たちが感想を発表し合った際の板書である。児童たちは、第5・6時までの様子を模造紙にまとめ、教室に掲示した。南海トラフ地震の甚大な被害を想定したり、掲示を何度も見たりして、感想を発表し合った。この学習から、市や避難所に頼ればよいという考えでは不十分だと気づくことができた。



【資料7】第6時の授業の板書

以上のように、第二次を通して、大きな地震と津波の被害想定およびそれに対する市の防災計画を知った。しかし、市民や児童の防災に関する意識は低い。そこで、いざというときのために自分たちは何をすべきかを考えることとした。

《第三次》 いざというときのために、碧南市への要望をまとめる 第7～10時

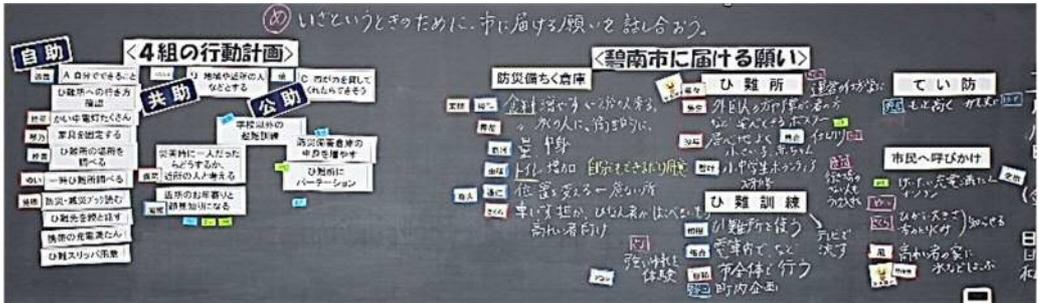
(仮説Ⅰ・手だてイ、ウ 仮説Ⅱ・手だてア、イ)

碧南市が南海トラフ地震によってもたらされる被害を知り、また、碧南市がとっている防災計画を知った上で、自分たちも行動計画を立てる必要があると気づくことができた。第三次では、これまでの学習を受けて生まれた疑問をもとに、どんな行動をしていくべきかを話し合った。

く意見が付け足された。【資料11】

このことで、一つのアイデアを、よりいっそう深めることができた。児童たちは、自分たちですべきこと、住民同士で協力してすべきこと、政治の働きを必要とすること、に分類することができており、公助に絞って、それぞれの願いを深めながら話し合いを進めることができた。話し合いの最後に、「なるほど」と思った友達の見いに対し、理由を添えて発表する場面も設けた。全員に発言の機会をつくることができた。【資料12】

児童Aは、メモをとりながら、友達の見いに「なるほど」と記し、考えを広げていった。



【資料12】全体での話し合い

【資料13】は、児童Aの第9時のふり返りである。自助・共助・公助の全てがないといけなと気づいたと記した。

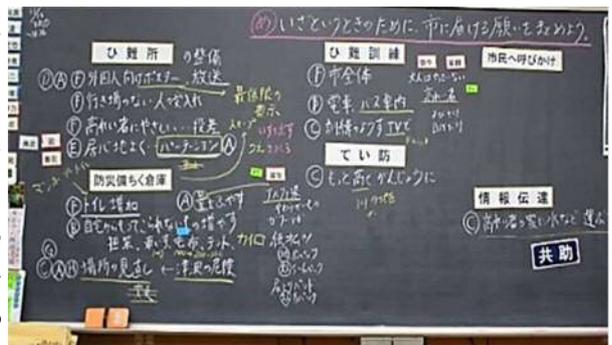
この授業には、第5・6時で招いた市の防災課の方に再度来ていただき、児童の話し合う様子を見ていただいた。授業の最後に、話し合い活動の感想を話していただき、今後、市の防災を担う児童たちへの期待やはげましの言葉をかけていただくことができた。そして、第10時は、これまでにまとめた市に届ける願いをグループごとに検証し、より具体的な要望として発表し合った。【資料14】

【資料15】は、検証後に、グループで話し合った児童Aのワークシートである。前時に、全体で、備蓄倉庫の中身の少なさが話し合われており、児童Aは、自らの備蓄倉庫の中身についての考えをグループ内で伝え、本当に市に願い出るべきことは何だろうかと具体的にまとめることができた。

児童たちは、ゲストティーチャーの話、実際に見せていただいた防災備蓄倉庫の中身、一人調べの内容を十分に活用していた。さらに、友達の見いを聞き、グループおよび学級全体で話し合っ、市に届けるべき願いをまとめることができた。【資料16】

自助だけやってきただけあまり意識変えなかったな〜と今になって感じた。
 自助・共助・公助の全てがないと命は守りきれないし、公助も気にかけることで他の市民との協力も大切にも気づけた。本当に全て必要なかなと思っただけ全て実行することでよりよくなる命を守ることかできる

【資料13】児童Aのふり返り（第9時）



【資料14】「市への願い」の検証

1. 班で話し合っまとめた 要望書にのせる「願い」

行動計画	具体的な内容
備ちく倉庫の中身の市民がもつてこないものを増やす。	1台あたりの倉庫の中身は食料は市民ももってるので足りると思うけど、 毛布 → 140枚 → 1万 TL → 5台 テント → 32 (1M用) → 重たい → 16 → 30台 担架 → 27 避難所所収容人数 (碧南市) 10.22人 → 足りる? No!!

【資料15】児童Aの班で話し合ったまとめ（第10時）



【資料16】学級で話し合った市へ届ける願い
 碧南 小6年—7

4 結果の考察

- (1) 仮説Ⅰ「自分たちの地域とも関連深いテーマを設定することで、政治と自分とのかかわりを意識し、切実感をもって学習に取り組めるだろう」について

東日本大震災などの大きな災害による被害について学び、南海トラフ地震の被害想定を知ったことで、大きな災害が起こった時のことを真剣に考え始めることができた。そして、児童は、自分でできる備えについて考え始めた。さらに、ゲストティーチャーの方々から、東日本大震災の復興に携わった話や市の防災計画を聞き、また、防災備蓄倉庫の中を見せていただいたことで、いざという時のためには、自助・共助・公助の3つ全てが重要であると認識できた。具体的に立てた行動計画は、一人調べの段階では自助ばかりだったが、グループや学級全体で意見をまとめていくうちに、公助の重要性、さらに、市の力を貸してもらう必要性を感じるようになった。公助にあたるものは、精査して市にお願いするべきだと気づくことができた。単元のはじめには、自助しか思い浮かばなかった子どもたちが、市や政治の役割の大きさを理解し、災害に対する行動計画をさまざまな視点から考えられるようになった。最後に行った要望書をつくる作業を通して、自分たちが真剣に考えれば、社会を変えていくことができるかもしれないということ、また、そのためには、自分たちがよりよい社会をつくるために真剣に考えていくことが重要であると学ぶことができた。

児童Aは、市に望むだけでなく、まずは、自分でやることを見直すべきと考え、要望を出すために、もっと自分自身ができることに取り組んだり、学んだりしなくてはならないとして、政治をつくるのは市民一人一人であるということに気づいた。自分たちの地域と関連深いテーマの設定により、切実感をもって、政治と自分とのかかわりを意識することができたと考える。

- (2) 仮説Ⅱ「話し合い活動を工夫することで、他者の考えをもとに自分の考えを再構築したり、根拠をもったりして、話し合いに参加できるだろう」について

一人調べでは、次の話し合いでどんなことを話し合うのか、何から調べるとよいかということ伝え、取り組みませた。十分な時間を確保したことで、児童は、自信をもって自分なりの調べを進め、話し合い活動に生かすことができた。また、毎時ワークシートを回収し、朱書きを入れた。このことで、今まで人前で発言することを苦手としていた生徒も、自分の意見を言えるようになった。これは、一人調べをした量が多くても、ワークシートに記したどの考えを発表したらよいか明確になったことと関係している。あまり発言に積極的ではない児童も含め、ほとんど全員が話し合い活動で発言をすることができた。また、話し合いの際は、児童一人ひとりの考えを認められるように、グループの話し合いを経て、学級全体の話し合いへと進めた。

児童Aは、第三次の話し合いで、他者とのかかわり合いを通して、自らの考えをより深めていった。第7時でたてた行動計画は、自助ばかりであった。備蓄については、市の防災備蓄倉庫の中身に頼ることはできないから、自分で備蓄の量を増やすと書いた。第8時、第9時で、行動計画の自助・共助・公助の分類や本当に市に届けるべき願いを話し合ううちに、自分でできる備えをした上で（自助）、住民同士が協力し（共助）、市に力を貸してもらおうとできそうなこと（公助）だけを、市にお願いするべきだと考えた。防災備蓄倉庫の中身について、市民が持って避難できないものを中心に増やす必要があり、そのために市への要望が必要だ、とグループや全体の話し合いで気づき、要望書に願いをまとめることができた。

話し合い活動を工夫したことは、他者の考えをもとに自分の考えを再構築したり、根拠をもったりして、話し合い活動に参加することに有効であったと考える。

5 今後の研究課題

いざという時のための行動計画を考え、話し合ったことは、政治と自分とのかかわりについて見方・考え方をある程度深めることができた。前時までの調べ学習や話し合い活動を通じて、子どもたちは自分の意見をそれぞれもつことができ、自信をもって発言をすることができた。しかし、全体の話し合いでの子どもたち同士の意見の交流は少なかった。教師の話し合い活動の取り組みせ方や支援の仕方をさらに学び、身につけていく必要がある。それにより、主体的・対話的で深い学びへと向かっていくことができると考える。